

独から研究者視察

県に環境整備助言



国際リニアコライダー (ILC) の東北誘致を目指す県は12日、設計などに携わる外国人研究者の男性

2人を本県に招き、意見交換や企業視察を行った。国際学術都市の形成や多文化共生のまちづくりの参考にしようとして、本年度の新たな試み。研究者やその家族が安心して暮らすことができる教育や医療などの環境整備に向け助言を受けた。2人は加速器研究所のドイツ電子シンクロトロン (DESY) 所属で、ILCや関連の検出器の設計を担当するクラウス・ジンラム博士 (76) とスイスの大型円形加速器・LHC実験に携わるトーマス・ショナー・サデニウス博士 (45)。

盛岡市では県や盛岡市、奥州市、一関市の職員、県



東北精密の社員から製品について説明を受けるクラウス・ジンラム氏 (手前右) とトーマス・ショナー・サデニウス氏 (左から3人目) =12日、北上市村崎野

ILC推進協議会のメンバー側はILC誘致に向けた本約20人が意見交換。本県一県の活動ぶりを説明した。

2人は「研究者や家族が気軽に相談でき、あらゆる問題に24時間対応できるオフィスが必要」と提言。教育や医療の英語対応の必要性を説いた。研究キャンパスと関連施設間の移動では、シャトルバスやカーシェアリングなど多様な交通手段を用意するよう促した。

ショナー・サデニウス博士は「誘致に向けた課題を探し、解決に取り組んでいる。ILCを迎える準備はできつつある」と評価。一方で「東北の取り組みが欧州では知られていない」とも指摘し、積極的な情報発信を求めた。

一行は北上市村崎野の東北精密 (安藤修一社長) を視察し、半導体製造装置などに用いる製品や金属の接合技術について説明を受けた。盛岡市北飯岡の県工業技術センターも訪れた。

外国人研究者を招いた意見交換は、県が本年度新たに試みる事業で、今後継続的に取り組む。県の太平尚企画理事は「岩手が十分に発信しなければならぬ。具体的な課題解決に向け関係者と連携して取り組む」と語る。

ドイツ電子シンクロトロン (DESY) 所属のクラウス・ジンラム博士 (76) とスイスの大型円形加速器・LHC実験に携わるトーマス・ショナー・サデニウス博士 (45)。

ドイツ・ハンブルクにある国立の加速器研究所。職員は約2300人で、世界約40カ国から年間3千人以上の研究者が訪れる。かつては素粒子の衝突実験を行っていたが、現在は大型円形加速器 (周長2・3km) を用いて物質の構造解析を行う放射光実験などを展開。スイスの欧州合同原子核研究所 (CERN) のLHC実験にも多くの研究者が参加している。素粒子物理学部門長のヨアヒム・ムニッケ氏はILC計画を推進する国際将来加速器委員会 (ICFA) の委員長。